



その時、農業が動いた
スーパーキャロトル

執念の誕生秘話

南富良野偉人伝

南富良野町の人参といえば、道内でも屈指の生産量を誇り、この秋も町内各所で収穫が行われている。今から十三年前、その人参の収穫作業に革命を起こした人物がいる。(株)南富自動車サービスエリア代表取締役会長、長田秀治さん。今や国内シェアナンバーワンを占める「スーパーキャロトル」誕生から現在までの軌跡を追った。

長田秀治さんは、南富良野町金山地区の生まれ。小さい頃から機械いじりが大好きで、整備士になることが夢であった。両親に「高校に行け」と再三言われながら、中学校卒業後は富良野の職業訓練校に進み、その後希望通りディーラー会社での自動車整備業に就く。そして昭和四十七年六月、自動車の分解整備をメインに扱う「南富良野サービスエリア」を南富良野町幾寅に開業。創業後たった十一年間で車検台数五百台を達成した。

順調な経営が続いていた。しかし、平成二年、整備士一筋でやって来た長田さ

んに、大きな転機が訪れる。

「人参を収穫する機械を作ってくれないか。」地元の農協職員との何気ない会話から出

た言葉だった。「そんなもん、買えばいいだろう。」と長田さん。すると相手から「どこにも売ってないんだよ。」と返ってきた。今時、お金を出して手に入らないものなんてあるわけがない。長田さんは、疑いながら、人参を収穫する機械について調べた。すると、やはり国内において、そのような機械は本当に出回っていないらしい。外国製品は出ているが、聞けば、収穫のシステムが大雑把で日本の人参収穫には適してはいないようだ。

・・・会社の経営は、いたって順調だ。自動車を売り、整備をして、それに見合った収入を得る。好きで始めた仕事だし、面白味は、と言われると少しづつ薄れてきていることは否定できなかった。「じゃあ、やってみるか。」これが長田さんの挑戦の始まりであった。

試行錯誤の日々
中古のコンバインをベースに外国製の機械を模倣することから開発がスタートした。何度も何度も改良しては、畑に出てテストする、その繰り返し。人参をどのような方法で収穫するのがベストか、そればかり考える日が続いていた。しかし、模倣からは何も生まれないのだ、と

気づいたある日、長田さんは、ひとつの方法を編み出すことに成功する。

まず、畑に生えている状態の人参の葉を二本のベルトが挟み、土中から抜き取る。人参はベルトに挟まれたまま、機械内部を移動し、刃が仕込まれた部分で葉がカットされる。この葉の根元ギリギリを切るという課題に最後まで悩まされた。そして後部に乗る人の手で選別され、大きな袋に納まる、という仕組みだ。

こうして完成した人参収穫機には、人参(キャロトル)を収穫する(とる)を掛け合わせた愛称がつけられた。「スーパーキャロトル」の誕生である。時は平成四年、農協職員と会話したあの日から、二年が経過していた。

スーパーキャロトルは、一台で約十五人分の仕事をこなした。従来の手作業だと、一日で約三アールが限界のところを、機械は四十アール分を収穫する。初国生産四台の内、三台が売れて以後、スーパーキャロトルの評判は次々に広がり、現在までに道内を中心に、三百五十台を売り上げる結果となった。

ヒットの理由
スーパーキャロトルがヒット商品となった要因は、ほかにもある。まず、世に出たタイミングだ。農業従事者が多かった昔は、大金をはたいて機械を買うよりも、人を雇う方が安く済んだ。しかし、時代の流れとともに農業人口が激減、営農者にとつては、「待ってました」と言わんばかりの登場だったのだ。

次に、試作とテストの回転の早さが挙げられる。大手の機械メーカーは、新製

品を手がける場合、通常十人程度の開発チームを編成し、都市部から試作品を地方へ持ち込む。そしてテストで得たデータを会社に持ち帰って改良し、またやって来る。その往復に膨大な時間を要するのだという。一方、長田さんは自社工場

で製作した試作品をすぐに地元の畑へ持って行き、生のデータを得る。人参に傷をつけないようにするには、葉の根元からスパッと切るには、畑に出る度に課題が生まれた。しかし、これが開発のスピードアップにつながった。また、開発者である長田さんが自ら運転することで、実際に機械を動かす人間の立場に立った商品開発が実現できたのだ。

スーパーキャロトルは、特許を取得、また、個人でも購入可能な、小型で価格を抑えたもの、畑作方法に合わせたものと製品を増やし、知名度を上げていった。飽くなき挑戦

聞くところによると、キャベツ・レタスなどの葉物や、スイートコーンを収穫する機械を切望する声が多いらしい。しかし、次はどんな製品をと尋ねると、長田さんの答えは意外なものだった。「キャロトル」の耐久性や安全性などをまだまだ改良していかなければならないし、九州・四国など道外の畑作にも使えるものも開発したい。「長田さんの仕事に「妥協」という言葉は存在しないのだ。

機械いじりが大好きな少年が見つけた「ものづくり」というライフワーク。これからも納得のいく製品開発を信条に、長田さんの挑戦は続いていく。

